



THE STEINWAY CHRONICLE JAPAN

2026

INSTITUTIONAL NEWS FROM STEINWAY & SONS

特別インタビュー

皆で育てるスタインウェイ ピアニスト 金子三勇士さん

2026年に日本デビュー15周年を迎えたピアニスト金子三勇士さん。演奏活動に加え、各地の主要ホールのピアノ選定に携わることも多い金子さんに、スタインウェイピアノとご自身の関係性や、日本のホールにおけるピアノの現状についての感想を伺いました。



一言で言いますと、スタインウェイピアノは「信頼できるパートナー」であるということです。その背景にあるのは、歴史と伝統だと思います。そして、時代とともに挑戦していくところも、スタインウェイらしさの一つだと思います。

もう一つが「スタインウェイサウンド」です。経年数はもちろん、世界中のスタインウェイが置かれている場所によって気候も環境も

——これまで国内外の各地のホールでスタインウェイピアノに触れていらっしゃると思いますが、使用するピアノについてはどうお感じでしょうか。

スタインウェイは、一つひとつ職人の手で作られている部分が大きく、同じモデルでも音色や弾き心地が異なり、その一台ごとに合った向き合い方やケアが必要だと思っています。

ホールでの管理や、調律師さんの適切で丁寧なメンテナンスはもちろん、アーティストから子どもまで幅広い人に弾かれ、愛されてきたピアノは、触れたとたんに「この楽器は大切にされてきたんだな」と感じます。それはピアニストとして幸せな瞬間ですし、また演奏しに行きたいなと感じます。

一方で、温度・湿度管理やメンテナンスが十分でなかったり、逆に大切にされるあまりほとんど弾かれていなかった

(次頁につづく)

——スタインウェイアーティストとしてもご活躍されている中で、改めてスタインウェイの魅力について教えてください。

ケアも異なり、状態はいろいろです。それでも演奏者として「スタインウェイの音」が引き出せるという安心感が、スタインウェイを選ぶ理由でもあります。

THE STEINWAY CHRONICLE JAPAN 発刊のご挨拶

スタインウェイ・ジャパン株式会社 代表取締役社長 阪本道子



おかげさまでスタインウェイ・ジャパン株式会社は来年 30 周年を迎えます。これまでご支援を賜りました公共ホール・教育機関をはじめとする関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。

THE STEINWAY CHRONICLE は、米国本社が長年にわたり発行している、公共ホールおよび教育機関のお客様向けの情報誌です。このたび日本版を創刊し、国内外の事例やアーティストの声、ピアノの維持管理・更新に関する情報をお届けしてまいります。

本誌が皆様の施設運営の一助となり、音楽文化のさらなる発展に寄与できれば幸いです。

(つづき)

たりすると、もったいないと感じます。

また、ピアノは他の楽器と比べて大きく、部品も多いですし、構造上かなり大きな負担がかかっています。ですので、どうしても“寿命”というものがあって、メンテナンスだけではカバーしきれない部分も出てきます。

ご家庭で大切に使われているピアノには、100年以上経ったものが今も演奏されている例もありますが、大きなホールで、多くのお客様を満足させるピアノという観点になると、求められる状態は違います。

——金子さんがピアノの寿命を感じるのは、どういった状態やタイミングでしょうか。

特に厳しいと感じるのは、大きな音が出にくくなることです。1,500席以上のホールで、一番後ろに座っている方まで楽しめる演奏をお届けするには「ダイナミックレンジ」、つまり強い音から弱い音までの幅がどれだけ広がりが、大切な要素のひとつです。大きな音が出にくくなると、演奏者が力をかけて音を出そうとし、割れているような音が出てしまいます。これが

ダイナミックレンジという観点で“寿命”を感じるときかなと思います。

——最後に、ホールの方へ、スタインウェイへの向き合い方全般に関してアドバイスをお願いいたします。

スタインウェイピアノがあるのであれば、ぜひ丁寧に向き合って、適切な愛情をもって使っていただきたいと思いますし、もし将来的に買い替えということになった時も、しっかり選定をして、より良い状態を維持しながら、多くの方に音楽を届けていって

ほしいと思っています。

そのためには、ホールの担当者さんや調律師さん、楽器店さん、アーティスト、それぞれが本音で意見を出し合うことがとても大事なんですよね。演奏家としても、実際に弾いて感じたことは率直にお伝えしていくべきだと思っていますし、お客様や地元の先生方の声の中にも、実は大切なヒントが隠れていることがあります。いろいろな立場の人が関わりながら、一台のピアノをみんなで育てていくことが、より良い音楽につながっていくと思います。

金子三勇士 プロフィール

2008年バルトーク国際ピアノコンクール優勝。
6歳より単身ハンガリーに留学。11歳より飛び級でハンガリー国立リスト音楽院大学に入学、16歳で帰国し東京音楽大学付属高等学校に編入、東京音楽大学を首席で卒業、同大学院修了。
これまでに数多くのオーケストラと共演、世界20カ国近くの各地で演奏している。2026年には日本デビュー15周年を迎え、全国各地で記念コンサートを開催する。

〔出演公演〕

日本デビュー15周年記念
金子三勇士 ピアノ・リサイタル
10月18日〔日〕16:00開演
東京オペラシティコンサートホール

「東京オペラシティは『プロのピアニストになって、この舞台に戻ってくるんだ』と、9歳ながら自分に誓った会場です。そして実は初めての経験なのですが、大事な節目のこのリサイタルで、自分が選定したピアノを弾かせていただきます。その点にもご注目いただければと思います。」



アーティストに選ばれ続けるピアノを維持するために

スタインウェイ・ジャパン株式会社 テクニカルサービス・マネージャー 藤倉裕介

1997年のスタインウェイ・ジャパン設立以前より、日本全国の公共ホールや教育機関には数多くのスタインウェイが導入されており、その数は1,000施設を超えます。特に1990年前後に導入されたピアノは30年以上が経過し、近年ではコンディションや今後の維持管理についてご相談をいただく機会が増えています。

ホールのピアノには、演奏家が安心して演奏に臨める高い性能が求められます。そのため、不具合が発生してから対応するのではなく、性能の低下が進む前に適切なメンテナンスを行うことが重要です。

長年の使用により、ハンマーやアクション部品の摩耗、調整状態の変化などが進行し、「音の伸びが悪い」「タッチの反応が鈍い」「音色のコントロールが難しい」といった症状が現れることがあります。こうした変化は少しずつ進むため気づきにく

いものの、演奏家にとっては表現力や演奏性に大きな影響を与えます。

ピアノの状態は設置環境や使用頻度によって異なりますが、定期的な点検と計画的な修理・オーバーホールにより、本来の性能を長期間維持することが可能です。

スタインウェイ・ジャパンおよび正規特約店・技術パートナーは、純正パーツを使用した保守点検・修理を通じて、皆様の大切なスタインウェイがこれからもアーティストに選ばれ続ける存在であり続けるようお手伝いしております。ぜひお気軽にご相談ください。



公共ホールや教育機関へのサービスに関する情報や
ご相談窓口のご案内はQRコードから



細やかな情報収集により 実現したピアノ更新

松戸市 文化スポーツ部

文化芸術創造課・文化施設担当室 伊介 淳様

公益財団法人 松戸市文化振興財団 専門監 須藤卓眞様



今回のピアノ更新に至った背景を教えてください。

(伊介) 開館の1993年以来使用してきたスタインウェイ D274 は、毎年の保守点検に加え、これまでにオーバーホールを1回実施していました。しかし近年、演奏中に調律が狂う事例が複数回発生し、検品の結果、調律の保持力が低下しており、オーバーホールでは費用対効果が見込めないことも判明しました。文化会館が今後もプロに選ばれる演奏環境を維持し、市民の皆さまに質の高い音楽をお届けできるよう、また近年の世界情勢の影響によるピアノ価格の上昇も踏まえ、今回の更新を決定しました。

予算要求にあたり重要視した点がありますか？

(伊介) D274 がホールに必要なピアノであることを客観的に示すことを重視しました。千葉県内の近隣ホールや、同規模でプロ公演を行っている東京都内の著名ホールを対象に、設置ピアノや貸出状況などの情報を Web 検索や担当者への電話で収集しました。

調査の結果、主要ホールでは D274 が標準的に設置されており、特に民間

のホールでは短いスパンで更新し、常に複数台を所有していることがわかりました。このことは、予算要求の説明において非常に大きな材料になりました。

今回は官公庁オークションを利用して旧ピアノを売却されました。

(伊介) ピアノ保管のスペースに限りがあることと、購入費用を補う理由から、売却を決めました。官公庁オークションは、国や自治体の行政機関が民間のオークションサイトで財産を売却する仕組みです。落札額は、前年に近隣の自治体が同じ D274 を売却した事例を参考にしていました。新品の価格上昇に伴い、中古の価格も上がっているという状況でしたが、実際の落札金額には正直驚きました。オークション期間中の下見会では、参加された皆さんが「非常に状態がいい」とおっしゃっていました。日頃のピアノの保管状況が良く、評価を得られたことが入札額につながったのではないかと思います。

お披露目コンサートでの来場者の反応はいかがでしたか？

(須藤) お披露目は、ショパンコンクー

松戸市文化会館について

1993年に総合公園「21世紀の森と広場」の一角に開館。1,955席の大ホールと516席の小ホールを備え、「森のホール21」の愛称で親しまれている。プロによる興行を主な用途としつつ、市民による演奏会、成人式などにも使用されている。

ル入賞者によるコンサートでした。来場者アンケートには、「ピアノの音が素晴らしかった」「購入してくれた松戸市に市民として誇りに思うとともに感謝いたします」といったコメントが寄せられました。特に嬉しかったのは「ピアノシモの音が信じられないくらい素晴らしかった」というコメントで、これは広い空間でのピアノシモの表現力の高さを評価していただけたということだと思います。

今後の展望について、新しいピアノにかける期待をお聞かせください。

(須藤) 新しいピアノとともに、今後もホール利用者の期待に応え、さまざまな演奏会や催しで活躍してくれることを期待しています。そして文化会館がこれからも、市民の皆さまに親しまれ、文化・芸術を身近に感じられる、松戸市にとって重要な場所の一つであり続けてほしいと思っています。ピアノがどのように成熟していくかも楽しみです。そのためにも、いろいろな方に弾いていただきたいと思います。

(伊介) 予算をお願いする中で、市議会からも「新しいピアノを市民の方に開放するような機会を設けてほしい」という要望がありました。自主事業を通してスタインウェイにどんどん触れてもらい、親しみを持っていただくことで、より多くの機会に使っていただけると考えています。



(左から) 須藤様、伊介様

42年ぶりの大型投資と 地域文化振興への取り組み

熊本県 観光文化部 観光文化政策課 主事 中島佳乃子様
熊本県立劇場 舞台技術グループ 金子千佳子様

今回のピアノ更新に至った背景を教えてください。

(金子) 当初、中長期運用計画にオーバーホール計画を含めていましたが、これ以上のオーバーホールには耐えられないという指摘をスタインウェイ・ジャパンからいただいたことが決め手となり、計画の見直しを図りました。全国の公共ホールのピアノ更新状況や、ホールにおけるピアノの重要性などについて資料を作成し、提案書の中島さんへ提出。協議を経て予算編成へと結びつきました。

予算編成までのプロセスで工夫された点はありますか？

(中島) 行政内の説明では、なぜスタインウェイ D274 を選ぶのかの根拠の提示が必要でした。他のピアノに比べてスタインウェイの使用頻度が圧倒的に高いこと、熊本県立劇場には国内外の著名なアーティストを呼ぶノウハウがありますが、良い状態のスタインウェイを所持していないと招聘に結びつかなくなる可能性があり、県立劇場として質の高い実演芸術を県民に届ける役割



(左から) 金子様、中島様

が果たせなくなることを説明しました。

クラウドファンディングでは500万円近くの寄付が集まりましたが、実施した経緯と成果について教えてください。

(中島) ピアノ購入の財源確保を目的に実施しました。ふるさと納税制度を活用したクラウドファンディングで、150名の方から489万3000円をご寄付いただきました。県外の寄付者が約3分の2を占め、金額では県内が約45%を占めました。全体として、県を越えた熊本県立劇場の認知度や、地域の文化拠点という役割への理解があったからだと考えています。

今後クラウドファンディングを検討する自治体へのアドバイスはありますか？

(中島) 県のホームページやSNSに加えて個別の働きかけが重要だと感じましたが、企業訪問や、劇場と直接関係のある企業の方や音楽関係者など、より関心を持ってくれそうなどところへの個別アプローチという方法もあったのではないかと思います。

ピアノ選定はピアニストの金子三勇士さんが務め、お披露目コンサートにも出演いただいています。

(金子) 金子さんには何度も出演いただいております。ホールの特性も熟知されています。コミュニケーションが取りやすく、購入後も意見交換できる関係性を築けたと考えました。お披露目コンサートでは「ここからがスタートです

熊本県立劇場について

コンサートホールと演劇ホールの2つを備える劇場として1983年開館。1,810席を有するコンサートホールの年間利用率はおおよそ75%と高く、県の文化振興の拠点としての中心的役割を担っている。

ね」とお話しされており、県民の方をはじめ様々な方が弾くことで育っていくピアノを、皆で見守っていくという姿勢が印象的でした。また、コンサートデビュー前の弾き込みでは県内約20名のピアニストにご協力いただきました。ピアノの納品後、管理面で変わった点はありますか？

(金子) 令和5年にピアノ庫の空調改修工事を行いました。空調設備が整い、湿度管理も集中管理室でできるようになり、新しいピアノの導入にはとても良いタイミングだったと思います。また、3台あるスタインウェイの使用頻度も、劇場側でバランスを心掛けるようになりました。

今後の展望について教えてください。

(中島) プロの方だけでなく、地域の方にも弾いてもらいたいと思っています。さまざまな方がスタインウェイを弾き、その姿を客席で見た方も関心を持つという形で次世代の継承につながる役割も担っていけたらと思います。
(金子) 今秋から長期改修工事に入りますが、これは劇場が続いていくための工事でもあります。この新しいピアノが劇場の新たな魅力となり、地域の方々により良質な芸術文化を届ける拠点になっていければと思います。



Steinway オリジナルグッズプレゼントのお知らせ

THE STEINWAY CHRONICLE JAPAN 創刊号はいかがでしたでしょうか？本誌の今後の内容や、弊社のサービス向上のため、アンケートにご協力をお願いいたします。ご回答くださった方には、A4サイズが入る Steinway & Sons ロゴ入りトートバッグをプレゼントいたします。

(締切：2026年8月31日)

アンケートご回答



THE STEINAY CHRONICLE JAPAN

創刊号 2026年7月発行

発行 スタインウェイ・ジャパン(株)

〒140-0002 東京都品川区東品川

2丁目6-4 G1ビル3F

公共ホールや教育機関へのサービスに関する情報や、ご相談窓口のご案内は、右のQRコードから。

